

「新しい世代が見た満洲」シリーズ 第4集の1

第1次世界大戦後の大連日本人社
会における日中提携論の展開と挫折

日本大学文理学部教授 松重充浩



第1次世界大戦後における大連という場所では日本人たちが何を語っていたのかを考えてみたいと思います。

1919年、人類が経験したことのない未曾有な大戦だった第1次世界大戦が終わり、世界はあらためて新しい世界秩序をつくっていくとする大きな趨勢の中にあり、新たな世界秩序の構築は、東アジアとりわけアジア太平洋地域ではワシントン条約体制が一般的です。大連にいた日本人にとって重要な点は条約に根拠を持った既得権益が再編・縮小される可能性が現出したことです。日々植民地、正確には租借地の中で、国際秩序に従って生きてきた日本人にとって新たな秩序が問われる切実な問題として表れてきま

す。世界がどんな体制と構造を持つかは、ここで生活する日本人にとって大きな問題であり、このことを巡って喧々囂々の議論が展開していきます。

現地の商工業者は満鉄を別にして、多くの日本人の事業は中小企業を中心に展開していました。それが戦後不況、金融逼迫、合理化の失敗などの影響で緩やかに景気が後退、停滞していく状況が、20年代を通じて起こってきます。より切実な問題となったのは、人々の意見をどこで、どんな形ですくい上げ、言論化していったのかということです。

総合雑誌の『満蒙の文化』

『満蒙の文化』という雑誌が「満蒙文化協会」（20年設立、26年「中日文化協会」に改称）から刊行、後に『満蒙』（23年4月号）と改称されます。大連には多くの雑誌や新聞がありました。総合雑誌として最も多くの読者を集め、安定的かつ長期的に発行されています。復刻版が出ており、大連における大方の議論の趨勢を見ていく上では格好の資料です。満洲とりわけ大連にいた日本人全体を代表しているわけではなく、中層以上を対象としています。

中・下層の人たちが抱えていた諸問題を言説化して話す場所は、やはり満洲日日新聞（満鉄発行）の投稿欄あるいは巷の噂欄を見る必要があります。今でいう

三面記事といわれるようなコーナーもあります。

もう一つ重要な点は、西洋史研究が明らかにしているように、第1次世界大戦が、ヨーロッパ、イギリス、フランスそしてドイツの一部にとって未曾有の出来事であり、相当強いダメージを受けたということです。とりわけイギリスにおいてはそうでしたが、日本にはこの痛みがありません。全くないわけではありませんが、ヨーロッパほどの強い痛みを感じた戦後体制ではありませんでした。

これからの植民地支配は経済や政治、軍事だけでなく、文化が大切だという考えが満鉄を中心に形成され、満蒙文化協会が20年に設立されます。そこでは「満蒙及び東露に於ける文化開発に資せんが為生産興業の一般的紹介其他必要なる施設を為す」（同会規約総則第一条）を目的とし、大変大きな団体に膨らみます。満洲事変直前には3千名を超える会員を抱える、大連での大きな文化サークルになっていました。様々な文化事業に関与し中国人に対する事業も含んでいます。満蒙文化協会は、『東北文化月報』という中国語の雑誌を20年9月に創刊しています。終刊は終戦のどさくさでよく分かりませんが、復刻版は43年10月号以降の

ものは見当たりませんでした。44年ぐらいまでは出ていたものと思われれます。

文化事業重視の重要性

『満蒙』の大連出版界での位置づけは、最大の発行部数を持つ総合雑誌で、各種状況の紹介・啓蒙記事を掲載しています。日本国内（内地）にも寄贈を含めて200（300冊配られています。大連の私たちは、内地の報道が自分たちの実態を正確に反映していないと考え、満蒙文化協会の人たちは、資料や漫画、写真、中国人の特徴とか、日本語と中国語の意味の違いとか、いまの中国語教育でも使えそうなものを持って、およそ半年もかけて全国主要都市を回るといことも行われました。

満洲、大連において大きな発言力、大きな部数を誇っていた『満蒙』で日中関係や新たな世界秩序、東アジア秩序などがどう議論されていたのか、創刊号の巻頭言「新たな国際関係」では、「今迄の日本の対外政策は単に政治的又は経済的の立場からのみ思考されて、其の文化的意義に就ては殆ど之を考慮に置かなかった様である。然し乍ら苟も文明国民として今後の国際関係に処するにはどうして

も其の対外政策に就て常に文化の方面からも慎重に考慮を加へて之を決する必要がある事は勿論であつて」と述べて、どうしてこうなったかというところ。余は昨年平和会議の開会当時恰も巴里に居って、日本の対支政策が世界の批評の標的となつた時」これはパリ講和会議で、対華21カ条要求を中国側が否認する、それに対し日本側がさらに否認を要求しますが、情報外部に漏れてしまい、パリの新聞を中心に日本は帝国主義的な抑圧政策をまだ展開しているのか、という論調が新聞に一気に出て日本の立場が強く批判されます。そういう目にあつて「若し日本が十年前から此の方面に今少し努力をして居つたならば『然らば我等は全然亜細亜大陸より手を引くべし乍然人類の文明を如何にせんや』と獅子吼して一刀両断に総ての問題を解決する事が出来たろうにと甚だ遺憾に思つたのである」（岩永裕吉『満蒙』19年9月）。ここで、2つのことを注目しておく必要があります。

1つは、多くの識者が第1次世界大戦以降、植民地支配や対外的な進出というもの、もはや文化的なテーマを抜きに語れない、経済や軍事、政治以外に文化のことを考えないと、立場が説明できなくなっていると言っています。もう1

つは、10年前から日本は残念ながらそういうことを考えていなかったということ。ないわけではなく、後藤新平が言った「文装的武備」という問題もありますが、一般には経済の開発に留まったということだと思います。

文化的内容をどう出すかについて、31年以降『満蒙』が繰り返していることは、「科学的」「客観的」な視座ということ。満鉄調査機関の協力も得ながら、各種調査結果を載せますが、これが後藤がいついた「文装的武備の系譜」を大きく押し出していくことで、文化の内容とは客観性を持ってきちっとした形で伝えるのだということです。

満蒙文化発展の終局の理想は、思想的、科学的根拠の培養だという言い方をしています。科学的というのは非常に重要です。引用の最後の「世界文化史上に新しき記録を提供するに至らしむことは、本協会終局の理想であり、また熱望である」（満蒙文化協会設立趣意書）と言っています。

満蒙文化協会が『満蒙』で強く主張したかったのは、新たな文化的統治あるいは文化を媒介にした関東州、大連の支配、統治の展開、これらを科学的な形で押し出し誰もが共有できるものとの理解を得たいと考えていました。そのため既存の

概念をいったん相対化させる必要があります。とりわけ20年代の前半を中心に言われ続けていたのは、日本人の中国人に対する優越感の相対化ということです。

日中間の相互理解のために

日本人はたいしたことがないみたいな話が、日本語が書ける中国の筆者から出てきますが、それは別に面白いことが言われます。1つは、日本人も中国人もお偉いさんには痛い目に遭っているという話です。「北京の国会も東京の国会も或る意味から往々にして国民の真実なる声を代表して居ない点がある事は如何にも能く似通ふて居る」というような言い方で、あいつらはとんでもなく遅れているという発想をいったん相対化させる力があります。つまりこれは提携に向かって共通の素地があるということで、こういう論調が結構出てきます。

さらに「起て！ 真に東洋平和のために」これは多分にアジア主義的な方向ですが、共通してアジアの共存共栄に向かって融和していくことができるということをスローガンのに並べたもので、巻頭言には、真のコスモポリタンみたいな話が出てきます。コスモポリタンは国民主義、

国家主義を相対化していきます。中国は国家の態をなしていないの思い込みがありますが、彼らと提携するとき国家、国家と言っては提携の素地ができないということ。今でいう同じ世界市民みたいなことですが、こういう論調が巻頭言に登場する状況が生まれています。そのため何が行われたかといえば、教育と合弁事業を取り上げ、彼らを教導し指導し、彼らに日本人と一緒にやることの大切さをどう教えるかということでした。

そのことを満鉄の重鎮であった石川鐵雄がこう言っています。「満蒙（南満洲及東蒙古）六万余方理の土地は決して日本の領地ではないことは吾人は改めて滋に記すまでもない。しかも満蒙の地はカナダ或は印度が英国の植民地であり、台湾又は朝鮮が日本の植民地であるという意味に於ての植民地ではない」と言っています。「若し日本が現在満洲に於て有する僅かなる土地を足場として、茲に文化的植民地行ひ之に成功することを得るものとせば、それは世界の植民地経営上に確かに革命的新生面を開くものでなければならぬ。英仏或は米国等が最後にその植民的版図を確定せる時代までは一世の風潮が権力的領土拡張を是認して居たが、今日に於ては此傾向は既に行きつ

まっけて居る」と言い、最後の「然らば其の新形式とは何ぞや。一言にして覆へばこれ文化的植民政策である。換言すれば、吾人は吾々の隣人に対する礼讓と信実と及び指導と教化、ここは非常に重要で、指導と教化とに因って満蒙の住民として日本人の彼等の地に到るは彼等の利益にして、日本人と事を共にするはその恵福なることを事実訴へて覚らしめなければならぬ」「そして世界に対して満蒙に於て日本はその門戸を閉鎖せんとする者に非ずして、却って世界の為に之を開放し之を清掃し、その賓来を待つ所以であることを信ぜしめなければならない」と言っています。

具体的な教化とは

もちろんここでいう教化とは、さまざまな教育施設や文化施設を作り、初等教育を中心として中国人を巻き込みながら進めていくということです。よく中国には義務教育がないというような誤解が流布していますが、中華民国が登場してから義務教育化されます。行くか行かないは自由で、日本のような強制はありません。それでは不十分と考えた日本側は、この頃を契機に満鉄付属地で向学堂を設

置、中国人に向けて初等教育が強く展開されることとなります。柱は2つで、日本語と簡単な技術、読み書き算盤を教えることです。日本の企業との合併のために働ける人材をどのように養成するかということです。彼らの存在が大きくなれば、中等・高等教育と彼らの道は開かれていきますが、ここでは第一歩をきちっとした形で開始しようということが言われています。合併している方の中国人がどう見ていたか、大変おもしろく今日まで続く文化論として通用します。

日本側は世界の新しい趨勢がある意味無邪気な形で吸収し、それを東アジア、とりわけ大連で展開できることを、大きく強く喧伝していました。しかし、やがて中国ナショナリズムの洗礼を受け、思ったほど中国の人たちは感謝もしなければなびきもしないということがわかってきます。

国際協調下での日中提携関係の模索と挫折が問題になります。22年頃の論調は「日本は従来支那に対しては決して共存主義の信条を抛棄した事はない。実に共存は日支両国に取りて古来よりの伝統的約束であったのである。然るに西来勢力が仕切りに東方を脅威し圧迫を加ふるに従ひ日本は自衛上已むを得ない立場に

措かれたるが為、一時支那の自尊を傷つけたるが如き結果を見なければ、之れ決して吾人の本意ではなかった。今亜細亜全面積の五分の二が辛ふじて亜細亜諸邦の自主的領域たるに止り、他の五分の三は英露仏米蘭等の勢力下に属する事を想へば、日本がその友邦支那に対して自衛と共存のために満蒙経営を引き受けたりと謂って非難せらるる理由は毫もないと信ずる」(巻頭言『満蒙』18号22年9月号)いろいろなあったけど今は違いますが、言いたいわけです。言うだけの根拠もあつたと思いますが、注目したいのは、中国側がこういう言い訳を引き出し、日本側が言わなければならないような対応をしてきたということです。

23年、「旅大回収」と言われる事件が起きます。23年の清朝とロシアとの約束では、旅大は返すことになっていましたが、日本は南満洲東蒙古に関する条約で、99か年間延ばしました。これは国際法上正当な手続きを経て結ばれた条約ですが、あらためて23年に、強要されて結ばれた無効の条約であるから返せと言いだします。これも雑誌の中に出てきます「斯かる正気の沙汰とも思へぬ問題」という言い方です。「持出して国民の眼を一時なりとも此方面に転せしめ其間僅な偷安を求

めねば立ち行かぬ程行詰った内政」、つまり中国側が、今もよく言われる「反日運動は中国共産党が苦し紛れの国内政策の一貫として起こしているんだ」という話で、ここでも同じ論法が使われます。苦しくなったら対外的危機を契機に乗り越えようとしているからこんなことを言っているのだということ、まさしく正気の沙汰とも思えないという言い方になっているわけです。

20年代中盤までは「吾人は国際友誼と国際自由の立場から各国の政治的、経済的及び文化的共同の進歩開発を必要とする。最近の軍縮会議はそれが消極的発現としても一階梯であった。それを積極的に進展拡充せしむるべきもの決して鮮少でない」国際協力下の維持ということに關しては手放さない姿勢は残っています。無邪気に始めてきたが反発もある、世界の新しい趨勢に従ってやっていくことに關しては手放さないぞという形です。

中国人の反応の背景

一方、中国側の反応の背景にあった中国人の日本人イメージはどうかというと、『満蒙』には何人もの中国人が執筆しています、2種類あります。中国語で書

かれたものを日本人が翻訳したものと、おそらく日本で教育を受け、日本に留学し、日本語に堪能だった人物が書いたものです。背景として大連には大勢の中国人がおり、その姿が雑誌上の写真にたくさん残しており、こういう形で中国人が徐々に登場してきます。また、公議会で、徳育、智育、体育、郡育、美育という教育に中国人なりに取り組むようになったという背景がありました。

そういう人たちがどんなことを言っているか2つ挙げます。「卒直に日本人の性質を云ふと怒り易く、度量は窄く、寛容性に乏しい。日本人が概して気軽なことは彼等と会話をすれば容易に知ることが出来る。此の様に缺點の多い国民ではあるが、常に奮闘努力して専心向上を謀って居るから不思議である」(王朝佑『満蒙』28年12月) 人格的には破綻者だけど、努力家だと言っています。東京外語に留学していたと思われる宇澄樓というペンネームの彼は、日本の植民地支配の欠点を言っています。「無論打つといふほどのことではないが、兎に角、御者が馬を鞭打つといったような恰好で、西洋人心目中の支那人車夫は正しく馬か牛だ。併し、この準牛たり馬たる車夫は、チョップとコツコツとに依り草駄天走りに馬力

をかける。その代わり多額なる報酬が与へられる。さり乍ら、牛馬に非らざる支那国民の彼等車夫は、このコツコツに因つて『おのれこの毛唐奴ツ』と反抗神経ピリピリと亢奮する。ただそれを直ちに形に表さずに馳ける。それは、目的地到着後に於ける多額の報酬予想に依る忍氣の一事の我慢たるに過ぎない。いくら沢山の報酬が与えられたからと言って、それだけで彼等の受けたる侮辱が彼等の反抗神経から駆除されるものではない。潜在反抗となつて幾時かは爆発すべく胸奥に刻みつけられている。併し、兎に角、この多額な報酬に依つて、西洋人と車夫との争いは殆ど皆無である。この異族の碧眼高鼻子に対し胸をさすつて我慢する車夫は、詎んぞ科らん、同文同種にして一年三百六十五日朝から晩まで親善を説く日本人に対するや、勃然として直ちに怒りを発して鉄拳戦を開始する」と言っています。なぜかという、「上海のハイカラ日本人の人力に乗る様子を看ると、何から何まで西洋人を真似る。笛を吹く。値段を決めずに飛び乗る。そして亦たチョップ、チョップを連発してステッキでコツコツやる。車夫は肚の中で『同文同種日支親善のくせにしゃがって、何といふ同情のない奴だらう』と思つて餘計に癪に

触はり腹がむかつく。併し、例の如く多額の報酬を貰へ得ることと思って耐えて馳ける。焉んぞ知らん、日本人の呉れる金は、西洋人のそれに比ぶればお話にならぬシミツタレ金だ」ケチだと言っています。

このことから、2つのことが読み取れます。国威発揚とか言っているが、経済的基盤がなければいけないということです。日本人は豊かになり、優越感に浸っているが、ケチというのはなぜかと言っています。もう1つは、365日親善と言っている人がやることかということですよ。西洋人はアジアの人たちをサルと言いつつ、露骨に軽蔑と差別意識を表に押し出しながら植民地支配をしました。日本人は口でいろんなことを言っているが、自分のプライドと引き換えにすべき大事なお金をくれない。西洋人と一緒だと思っているから鞭で叩く。別の言い方をすると、日本の新たな提携政策は、建前と実態をどう埋めるかという技術的な方法を持っていなかったことです。あるいは現実的な基盤を十分整備できないまま、問題は進行していたと考えるべきだと私は思っております。

もう1つ我々が注意をしておくべきことは、ナショナリズムの洗礼を受ける、

現地の人たちにとって内地にいる人たちが、この現実を知らないことです。もつと中国人にやさしくしたいと勝手なことをいうけれど、気楽なことをしゃべられたのではたまらないという意識も生まれます。

善意と好意で進めているのだ

大連の現地ではさまざまな言説が飛び交いますが、ここで重要な事は我々は善意と好意と世界的文明により、中国との親善と提携を進めようとしているが、残念ながら諸条件の下で中国の人たちに十分通じず呻吟している。しかし内地の人や内地から来た人たちは、大連にいる食いつぱぐれの日本人たちが言っているらしいが、ろくでもない連中だからこんなふうにするんだと無責任な批判を展開している。あるいは大言壮語を逆にされてしまう。とりわけ20年代の後半から30年、つまり満洲事変の直前に入るころからこういう話が出てきます。

「過去二十数年間、吾人はあらゆる機会に内地に向かって満蒙の真の姿を紹介して来て居る筈である。今日尚それを持続して来て居るが、単なる表面的事象のみならず、その政治、経済、社会等一般

に亘り、普及しているようで、事實は未だ徹底せぬ憾みがあり、内地に於ける識者すら、特別な興味を持つか、研究者でない限り、正鵠なる觀察理解は得られて居ない。従ってかかるいい加減な予備知識に依り満蒙に触れる場合、直ちに中日両国人間の民族的軋轢となり、或いはまた誤れる優越感が相互の文化的提携開発に重大なる障害を与えるのである」(恵須園『満蒙』31年5月号)と言っています。こういう現状が一方にあったということです。

20年代初頭第1次世界大戦後、新たに生まれてきた世界的な秩序、それに向かって現地の日本人たちは、多くの言説を述べます。そこには日中提携のための、新たな国際秩序による客観的、文明的な基準といったものに向かって大きく、前進できると言ったある種の楽観的見通しがあったことは確かでしょう。実際20年代、大きく後退しつつあった日本の経済の中であって、幾つかの試みが見られます。ところが、そういう試みは、必ずしも中国側の十分な理解や同情あるいは協働的な協力は得られませんでした。端的に言えば、文化的ギャップをどう埋めていくのか、というスケジュールに対する理解が十分でなく、あまりにもきらびやかな

文明的大義の前に、上手くいくんだと思ひこみ、気持ちばかり先に出て、言い訳みたいなものが出てくるのです。

こういう構造が生まれてきた言説について、1つは、客観的あるいは科学的情報を載せろということは、断片的ですが、満洲に対する知識の集積を進めていたということです。このことは31年の満洲事変以降、急速に国家をつくるとき、満洲青年連盟をはじめ満鉄の機関や、多くの人たちが積極的に参加します。新たな国家の形成に向けて矢継ぎ早に政策を押し出すだけの蓄積が20年代を通じて、照査分析の形で進みつつあり、その一部は民間のレベルまで達していたということです。初期満洲国における建国を支える環境がメディアを通じて形成されつつあったことを見逃してはいけないと思います。『満蒙』の分野構成を見て、すぐ目につくのは「研究」165本、調査のことを指しますが実態調査に関わることです。客観的な姿を形で示すのに最も適するものは、写真ですから、口絵写真、見聞きした実体験の旅行記などがどんどん蓄積されていく傾向が見てとれます。

中国側には文化侵略という言葉が出てきますが、日中間の対立が深まっている証拠です。国際協調下での日中関係の維

持・発展を展望しましたが、現実的には理念レベルでも「ワシントン体制」の問題、中国ナショナリズムへの対応策の欠如を露呈していきます。客観的な現状認識を提示しつつも、これに対する直接的かつ具体的な処方箋を提示できないという状況が続きます。

「実際支那の現状は内外の多難の危機に瀕して居る、新しき中国の青年学生は彼等の旧き然り余りに老朽腐靡に傾いて居る祖国の現況に対して深刻なる悲観を抱いて居るのだ、而して此の悲観は彼等を驅って新しき民族的自覚に導きつつあるのである。今や新生の産蓐についた青年支那の前には南北統一も財政の窮亡も奉直の闘争も皆な之れ旧勢力の閑葛藤に過ぎないかに見える、而して彼等は新民国の建設のために苦しんで居る。改造の道程に立てる現代支那よ！汝の不安は即ち之れ世界の上に課せられたる人類共通の不安であるのだ」（巻頭言『満蒙』25年1月）と言っています。北伐過程がいよいよ始まるうという過程、正確にいうと国民党が徐々に姿を立ち現せてくる直前の姿です。22年ですから、その姿は明確になっていませんが、五四運動以降に登場する新たな中国人の改革主体に対する理解を示しているのですが、それとど

う提携するかが一言もないのです。現実には暮らしている日本人が理念的にせよ、現実的にせよ、提携しようとするならどういう形なのか。共通の苦しみと言うことではお偉いさん同士、お互い苦しんでますみたいな話では提携できる。ここでも同じことを言っています。分析は正確です。

新たな中国ナショナリズムの主体は登場している。やがて彼らは中国国民党に結集し、北伐を完了し、新たな国民国家形成に乗り出していきます。その指導者が蒋介石だという認識は確かにあるのですが、それをどう提携に結びつけていくのかということが見えてきません。「支那を見るには表玄関ばかりのぞいてはならぬ」という言い方です。裏もちゃんと情報を集めます。しかし、集めてどうするかがまったく落ちていたということが重要なポイントになります。

その結果圧倒する現実が登場したとき、このようなお題目の理念はそれに呼応することはできません。圧倒するナショナリズムが日本の権益を大きく冒したり、じり貧で終わっていいのかという思いにかられるような中国側の台頭や状況が生まれたときにはこのようなお題目は、吹けば飛ぶような形で飛んでいってしまう

ということですが。具体的な処方箋を持たない、具体的な活動計画を持たない理念の限界性が露呈することになります。

言論的、思想的な行き詰まり

「以上の観点より二十年度に於ける中華民國は内政に外交に、全力をつくして、無理押しの棄身の強硬策を以て万進せんとすること明瞭である。しかして、或いは反蔣軍事以上の多事多難の年たるべきことは想像に難くない。就中、対日外交政策は内外政の中心として極端なる積極策を以て、或いは満鉄の徹底的圧迫、或いは全国的反日運動、等々が継続的に敢行されるものと見なければならぬ。中国の多事多難なると同時に、日本も亦近來の対外国難の襲来が豫想され得るのである。吾人はこの意味に於いて新民國二十年は亜細亞大陸にとって民國第一革命以来、最も大危機をはらむ危年として緊揮一番、挙国一致を以てこれに善処して誤らざらんことを期すべきであることを痛感するものである」(竹内南陽『満蒙』31年1月)と言っています。

これは1930年、まさしく満洲事変その直前の12月号に出た、あたかも満洲事変を予告するがごとの言説が登場し

ます。『満蒙』という雑誌の中で、こういうことを論述していた人たちはもはや打つ手がなくなっていたのだということです。言論的な行き詰まりと思想的な行き詰まりがはつきりした姿をもって立ち現われていた。これが最後のところですが。

31年9月18日、柳条湖で事件が勃発します。この時期、満蒙の友好提携の理念が、どういう形で消えてなくなり、代わりに何が出てきたかという問題を考えたいと思います。私は20年代を通じて育み挫折したものをどう復活させるのが、満洲青年連盟、後の協和会を中心とする若手にとって重要な課題になって行ったのではないかという仮説を持っています。その先導的な軍事的な役割を持ったのは、関東軍だったと思われます。関東軍はこう言っています。「満洲事変から満洲国建国へ、一心一徳へのシフトと東亜共同体への展開」と書いていますが、これは展望的仮説と言っておかなければいけません。

朝鮮軍司令官で、独断で満洲に進軍した林銑十郎は「日本ノ此ノ機会ニ於テ、鮮、満、蒙人ヲ撃ツテ一団トスル一独立国家ヲ建設シ、外ハ赤露ト漢民族ニ対シ、日本指導ノ下ニ其圧迫ヲ排スル一勢力ヲ満蒙ノ地ニ樹立スベシ。蓋シ民族自決ハ

欧州ニテモ天下ノ認ムル公論ナレバ、鮮、満、蒙ヲ一貫スル、ウラル、アルタイ、民族ノ団結ト、漢民族、スラブ民族トノ間ニ於ケル独立的立場ニハ、世界ノ同情ヲ集ムル理由アレバナリ。而シテ、日本民族モ亦此系統ノ民族ナレバ、此力崛起ニ助カスルハ当然ノ事ナレバ」と言っています。

ここに書かれてある内容とは、第1次世界大戦の後に出てきた民族自決が引用されているということです。林銑十郎たちが行っていたのは、この第1次世界大戦後に出てきた新たな秩序の理念を全面否定したのではないということです。この継承の上に具体的に新たな建物を立ててみせるというのが、おそらく満洲国にとっての重要な課題で、見果てぬ夢であったと思います。

(2015年10月21日・公開フォーラム)

講師略歴(まつしげ みつひろ)

1966年山口県岩国市生まれ。

1985年早稲田大学第1文学部東洋史学科卒、1991年広島大学大学院文学研究科東洋史学博士後期課程満期終了、外務省外交資料館勤務などを経て、2004年日本大学文理学部教授就任 専門は東洋史